

京都大学	博士（人間・環境学）	氏名	村田 智子
論文題目	文学的創造と「子供がぶたれる」幻想 ― 日本現代文学・サブカルチャーにおける幻想・倒錯・セクシュアリティの領域		
（論文内容の要旨） 本論文は、S.フロイトが20世紀の前半に主に神経症の患者の陳述から抽出した特異な空想、「子供がぶたれる」を、日本現代文学とサブカルチャーを舞台として論じたものである。全体は以下の6つの章から成り、短い序章と終章が付せられている。 第1章 「ヤオイ」と呼ばれる作品群と「子供がぶたれる」 第2章 森茉莉における少年愛の幻想と「父」 第3章 稲垣足穂の「A感覚」論 ― 死とマゾヒズム 第4章 フロイトにおけるマゾヒズム概念と女性性 ― 「子供がぶたれる」を軸として 第5章 倉橋由美子「どこにもない場所」の試み ― 拒食、女性性、書くこと 第6章 河野多恵子の初期作品について ― 「子供がぶたれる」幻想からマゾヒスティックな生殖へ フロイトが抽出したこの空想は、幼年期にすでに現れるものであると考えられ、女性がこれを持つことが多く、また典型的には男児が父親的な成人男性にぶたれるという形をとる。ただ、フロイト自身がこの空想は三段階を経るとしていることから、変異型がありうることを認めておかなければならない。 本論文においてこの空想が直接に扱われているのは、序章と終章、第1, 2, 6章である。 序章では変異型を含めたフロイト以降におけるこの空想の例示の紹介があり、本論文では精神分析と芸術作品の間での行き来という記述スタイルをとることが述べられている。 第1章では、「ヤオイ」というサブカルチャー作品についての説明があり、マンガをはじめとする多くのこのジャンルの作家と作品が紹介される。作家の発言も多く取り入れられている。このジャンルは女性作家が男性同性愛を描くもので、サド=マゾヒズムがその重要な要素となっているから、当該の「子供がぶたれる」という空想と同様の形式を持っている。著者はこの両者を比べて、二つの間には「親和性」があることが作家の発言からも分かるとするが、フロイトの提出した、この空想に内在する葛藤に関する議論を読み替えて、これらの作品における幻想は「能動的受動性」による創造性に向けられたものであると立論する。 第2章は、森鷗外の娘、森茉莉の作品についての議論である。森茉莉は父に溺愛されたとされ、確かにその実体験に取材したと考えられる小説があるのと並び、少年愛を描いた諸作品もあり、それらの作品はやはり「子供がぶたれる」空想と相同的な構造を示す。作家におけるこの両系列の作品を併せて、フロイトのいう「子供がぶたれる」空想と比較すると、フロイトが指摘した空想構成の三段階との対応がある程度見られることが判明するという。しかし著者はこれについて、フロイトの論を直截に適用することは避けるとし、作品の場合にはそうした三段階の進行は、むしろ作家が創造的自由を構築する過程に沿ったものであるとしている。 第3章は稲垣足穂論である。良く知られているように稲垣足穂には『少年愛の美学』という作品があり、そこでは少年愛に関連して「肛門」に関する主張が顕著である。作家の筆を通すと通常は嫌悪される肛門的な現象が文学的に受容され、このことはあたかもフロイトが、幼児に特有の性理論においては肛門的なものが嫌悪を伴わずに組織化されるということを述べているのを裏書きするかのようである。実際この作品の行論の中で			

はフロイトの肛門性愛理論への言及が多い。本論文の申請者は他の作品も含めて稲垣足穂論を展開し、肛門性愛とマゾヒズム、そして「死」のテーマとを結びつける。確かにこれらのテーマはフロイトの強迫神経症についての理論の中ですでに緊密に結び付けられているが、本論文の申請者はこの章でジャーナリスティックな書きぶりを残し、フロイトの強迫神経症論には深入りせず、むしろ足穂のいう「V感覚」（膣の感覚）との拮抗的な関係を強調することによって、肛門的な「A感覚」を強調する足穂を、単為生殖の次元を確保することを通して創造的・抽象的な次元を拓く革新的なジェンダー攪乱者として位置づける。

第4章では、第1, 2章で出されていたフロイトの空想論が再び取り上げられており、それはマゾヒズムとの関連の中に置かれ、「戦略的なマゾヒズム」なる説明概念が提出されている。それに第5章の倉橋由美子論が引き続く。ここでは「子供がぶたれる」の空想は出てこず、摂食障害（拒食症）が問題になる。これに関してはフロイト理論でなくビンスワンガーらによる精神医学理論が参照されており、父との合一が指摘され、第4章と同じく、単性生殖的に身体を扱うことが言葉を紡ぎ出すための「戦略」となっていると捉えられている。

第6章は河野多恵子論であり、この章では「子供がぶたれる」空想が作品世界に密着して論じられる。河野の作品「幼児狩り」の中で主人公の女性は空想に耽るが、そこに登場するのは父親に折檻される男児である。この空想はフロイトの報告している症例の空想経験に良く合致する。この顕著な類似には、過去にも何人かの論者が言及しており、本論文の申請者はそれらの論文を参照しながら、河野の小説に現れるマゾヒズムと生殖のテーマに論及する。作家の「ぶたれながら、するお産」という快の記述を梃子としながら、申請者は、戦争の記憶を背景にマゾヒズム的に「聖性」を担った少年の像を産出するという幻想が存在すると論じている。

終章では、このような文芸上の幻想と「子供がぶたれる」という空想は、女性の創造性の「戦略的表現を支える」ものであるということが指摘される。

(続紙 2)

(論文審査の結果の要旨)

精神分析中に語られる特異な空想、「子供がぶたれる」については、S.フロイトの論考はそれを主題的に論じ、その構造を明らかにしようとした最も古典的な試みであると考えられている。したがって、この空想の学術的考察に当たっては、精神分析を基礎とするのであれば、精神分析の諸概念、たとえば死の欲動やエディプスコンプレックスの関連の中で、この空想がどのように理解されるのか、つまり無意識のどのような機制を介してこの空想が現れ、機能するのかを解明することを、また現代文学やサブカルチャーに現れる類似の形成物を基にするのであれば、日本文化の何らかの特定の培地の輪郭を描き出した上で、その培地の思想構造に即してこの空想の機能を解明することを、それぞれ目標としなければならないところである。

一方、本論文の主眼はむしろ、上記のフロイトの論考が触れている幾つかの概念を、現代文学作品とサブカルチャー作品に適用し、申請者によるそれぞれの作品の理解の仕方を呈示するところに置かれていたと思われる。そうであれば、精神分析の概念を使ったことにより、作品理解においてどのような独自の側面を照らし出すことができたのかという観点から、この論文を検討してみなければならないであろう。

第1章では、サブカルチャー作品の表現様式と、フロイトの精神分析において患者ないし分析主体からもたらされた幼児期の空想の陳述が比較され、類似が述べられている。また、この空想の現れまでに、当該の空想そのものを第三段階とする、三段の段階の構造変遷があるというフロイトの有名な命題の紹介がある。しかしこのフロイトの立論に関しては、本論文ではその三段階が存在することの意味を、サブカルチャー作品に即して論じていくという方法を採用のではなく、むしろサブカルチャー作品の作家の側の主張に、申請者も軸足を置く。すなわち、フロイトが上記の三段階の論を立てる際に考察していたエディプスコンプレックス概念の重要性は中心的に検討されず、むしろ当該の空想が、創造性の発揮のために敢えて採用された「能動的受動性」であるということ、さらには、それは「父性の再構成」であるという意見が、結論として述べられる。

第2章は鴎外の娘・森茉莉による、「子供がぶたれる」の空想に似た描写を含む作品（「恋人たちの森」など）の説明から成る。ここでは少年と父親的男性のサド=マゾヒスティックな愛着関係が描かれている。父娘の密着を描いた『甘い蜜の部屋』を併せて考えると、女子のエディプスコンプレックスと性別の転換という問題が出現している。ここで娘による父への同一化が論じられ、父との同一化によって「書く」という創造的行為が行われていることが強調され、それに伴い、フロイトが指摘した三段階のうちの第二段階に潜在する「父は私を愛していない」という不安は、作家からは縁遠いものとされる。ここでも、当該の空想は、書く行為の能動性の発揮の通路になっているという第1章と同様の論法が用いられる。

第6章で論じられる河野多恵子の「幼児狩り」という作品は、「子供がぶたれる」空想との相似が「驚愕させるほど」顕著であるという。それに従い、文芸作品と精神分析的知見の間の比較は念入りに行われ、フロイトの三段階説が批判的に検討されて

いる。ここにさらに妊娠を主題とする小説についての議論が加わり、マゾヒズムの概念が導入され、戦争時代の生活経験とマゾヒズムとの関連が示唆される。これらの論議は、女性性や妊娠を巡る社会的議論に接続され、社会理論の中で、作家が少年の純粋性、聖性というものを描き出していると論じられる。この章では、これまでの章に比して漸く申請者が先行文献との討論の中に入ってきている。本章で本論文の主張が、社会理論を視野に入れた文芸評論の分野にあることが、ある程度明言されていると言ってよいであろう。それに応じて、終章では申請者は「幻想の領域」という短い一節を設け、幻想を扱う文学は女性をめぐる社会的・政治的言説に接続しているという見解を述べている。

なお、第3章の足穂論や、第5章の倉橋論も、その幻想の領域を構成していることが示唆されているが、両者は「子供がぶたれる」という空想を直接には含まないため、本論文内でのこれらの作家論の連節は必ずしも緊密ではない。

これまでの本論文の行論を振り返り、精神分析の理論体系がどう扱われているかを見てみると、当該の空想の精神分析的重要性を整合的に解明することが必ずしも目指されておらず、フロイト理論それ自体に関わる第4章においても、「戦略的マゾヒズム」という、ジェンダーをめぐる政治学のほうに結論を導く論法が採られている。

したがって本論文は、現代日本文学とサブカルチャー作品の中の、特徴のある作品群に関する精神分析を参照した社会論的文芸評論集という性格を持つと考えられる。幾つかの章において、「子供がぶたれる」という空想の意味についての結論的概念が提示されており、それらは、創造性の発揮のための「能動的受動性」であったり、書くための「父への同一化」であったり、「戦略的なマゾヒズム」であったり、男の子に託された「聖性」であったりする。これらの幾つかの概念は、女性の創造性の戦略という観点から終章で再び要約的に触れられている。

このように本論文は、精神分析研究にどう貢献するかという点には主眼が置かれていないとしても、フロイトの知見を現代日本文学やサブカルチャーと引き比べ、その都度必要となる限りにおいてその他の学者の論も俎上に載せて文学の上にまで及ぼす作業を遂行している。また章によってはいくらか評論的に傾く部分があるが、「子供がぶたれる」という空想を導きの糸として、マゾヒズムの観点から現代の日本（とくに女性の）文学に切り込む視点には一定の独自性が認められる。各章において結論として導かれた諸概念については、全体的な整合性の問題が残されているが、この空想を手掛かりにして、文学の一領域を浮上させるという潜在的可能性を指摘したことは、評価されてよいであろう。

よって、本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成27年2月17日、論文内容とそれに関連した事項について諮問を行った結果、改稿の上再審査が必要と判定し、再審査の結果合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当分の間当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。

要旨公表可能日： 年 月 日以降